

ベルクソンにおける現在

山 田 秀 敏

(序)

時間に関するマクタガートの周知の区分にしたがえば、ベルクソンはA系列主義者だということになるだろう。というのも、出来事の時間的順序であるB系列は、ベルクソンにとって等質的時間を構成するものでしかなかったからである⁽¹⁾。しかし、A系列を構成する過去・現在・未来といういわゆる時間様相も、持続と比較すれば副次的な重要性を持つにすぎない。それらは持続によって解明されるべき何ものかであって、それらによって持続が説明されるわけではないからである。持続が先行的に主張されている場合は、そこに過去・現在・未来が含まれているのは確かであるが、それらが理論的に先に与えられたからといって、それらがただちに持続を構成するわけではないのである。なぜなら、それらは等質的時間として架橋されることになるだろうからである。持続とは過去と現在の架橋ではなく共存である。

しかし、そうだからこそかえって、時間様相のベルクソン哲学内におけるポジションは大きな問題になり得るだろう。実際、ベルクソン自身が過去・現在・未来という術語を多用しているのであり、また、それらに特異な規定を与えているのである。では、持続によって時間様相はどのように解明されるのであろうか。本稿では、この問題を主として「現在」に関して考察する。

持続における現在は単に現在であるばかりでなく、常に新しい現在である。それ自体は無時制的な一つの同じ現在、言ってみれば形式的にして不変である現在が進行していく時間、そのような時間は等質的時間ではありえても持続ではない。さらに、持続は交代する現在でもない。現在が次から次へと交代することによって時間が進むのではなく—その場合、新しい現在はいったいどこからどのように誕生するのであろうか—、過去が世界を押し続けているからこそ、結果として新しい現在が過去から誕生し、それによって世界が進展するからである。

われわれの課題は持続における時間様相の現在とは何かという問いを考察することにある。つまり、持続はいかにして現在を創るのかという問いがわれわれの問題である。この問題に答えるため、われわれは現在なるものの現象的分析から議論を開始する。

（一）現在の新しさ

持続は方向性を持った時間であり、その方向は未来向きである。実際、ベルクソンはいわゆる記憶の円錐体について、こう述べている。「もし円錐体 SAB によって私の記憶力に蓄積された記憶の全体をあらわすとすれば、底面 AB は過去に位置して不動なままであるのに対して、あらゆる瞬間に私の現在をあらわす頂点 S は不断に前進し (avancer)、宇宙に関する私の現実的表象である動く平面 P に、やはりまた不断に接触する」(M.M., p.169)。さらに、「実のところ、記憶力は決して現在の過去へと後退にあるのではなく、反対に過去から現在への進展にあるのだ」(ibid., p.269)。つまり、持続は過去から現在へと流れている時間であり、前進する時間である。

二つ目の引用から明らかであるように、過去向きの持続は存在しない。持続が現在から過去へと移行することはない。この点で、持続は常識的な時間表象にとって既に理解困難な時間であると言える。というのも、常識は次のように時間を表象するに違いないからである。「未来のある事象が徐々に近づいてくる。それは今や現在である。そして、それはすぐにも過去になり、さらにだんだんと遠ざかっていく」。このような時間表象も現在の前進を語っているようではある。しかし実際には、それは出来事がより遠い過去へと流れ去っていくとすることによって、相対的に、その分だけ現在があたかも前進するかのような記述をしているにすぎない。こうした過去向きの時間は持続ではないわけである。

確かに、時間の方向という観念に、それは第二の時間とでも言うべきものを暗黙のうちに想定してしまっていないかという疑いをさしはさむことはもっともである。というのも、方向という観念が日常的な意味で理解される場合、その観念は相対的に不動な何物かを必要としているように思われるからである。空間が問題である場合、例えば大地や北極星がそれに当たる。だから、時間に関して流れる方向が言われるときには、前提上、不動なものは時間の中にはないはずであるから、第二の時間が暗々裡に想定され、それに対して第一の時間が流れるとされることになるのである。あるいは、結局は同じことになるのであるが、現在を相対的に不動とみなし、橋⁽²⁾の下を川の水が流れるように、時間が流れるとするのである。しかし、この場合、その現在（橋）は絶対的に不動であるわけではないのだから—もしそうならそれは時間ではなくなるであろう—、その現在自体が流れる第二の時間が最初の時間とは別に必要とされることになるわけである。この第二の時間は最終的には第一の時間と実は同一なのだとされることになるだろうが、しかし、その相対的に不動な現在が想定されているまさにその時には、それらは少なくとも時間の方向に関しては別々の時間でなければならず、結局は第二の時間に対して第一の時間が流れることにされるのである。

このように、時間の方向という観念は確かに疑わしくないとは言えない。ベルクソン哲学解釈においても、あたかも第二の時間に対して第一の時間が流れるかのように、つまり等質的時間に対して持続が流れるかのように、持続の方向が解釈されてしまう可能性すらあるだろう。持続が単なる心理的流動として理解されるとき、その危険は少なくない。なぜなら、心理的流動を等質的時間を用いて測定することはいつでも可能だからであり、加えて、等質的時間における現在の前進を語ることも可能だからである。もちろん、ベルクソンが持続の

前進を語る時、質的多様体が数直線上を移行していることが主張されているのではない。ベルクソンが時間の前進の観念を用いて言わんとしていることは、方向の観念に含まれている濃密な空間的思考を彼は拒否するであろうから、また時間の方向を時間外部から規定できるであろう目的論も否定するであろうから、現在が創造性や新しさのフィールドであるということなのである。ただし、この時、創造性や新しさとは語の通常の意味におけるよりも、広義に解釈されなければならない。それらが意味しているのは、あまりにもありふれたこの現在が常に新しい現在なのだということである。それは、例えば今この瞬間に描かれつつある一本の線が宇宙に新しい要素を本当にもたらしているということなのである。レンブラントであろうか幼児であろうか、その一筆がこの意味で創造的であるという点については同じである。持続は不在の未来へと不断に前進する。そのいわば先端部分に創造性や新しさのフィールドすなわち不可分な現在がある。そして、現在は誰にとっても現在なのである。

等質的時間の立場をとれば、あらゆる現象は等質的時間の中で生起するのであるから、あるいはそれは事象の計測のための単なるメトロノームでしかないのであるから、新しさとはまったく独立した観念だということになるだろう。ある事象が新しいか否かということと、その事象がどんなテンスを持っているのかということとは概念的に区別されるはずである。しかし持続はちがう。持続においては、事象は時間の作用によって進展するとされるから、例えば砂糖が水に溶け切るのを待つ「待ち遠しさ」(cf., E.C., p.10) という感情は時間の作用によって生じているのであって、この感情の展開そのものが持続の進展であると言ふべきなのである。その感情から持続を、それを等質的時間へと変質させることなしに、切り離すことはできない。持続の現在は常に新しい事象と共にあり、新しい何事か一宇宙の歴史の中でその時はじめて一度だけ生じ、もはや二度とは生じない特異で創造的な、しかし平凡でもあり得る出来事一がそこで生起しているのである。

さて、先に述べたように、過去向きの持続は存在しないのであるから⁽³⁾ 現在の事象が徐々に過去へと移行していくことはあり得ない。にもかかわらず、現在の事象が最終的には過去になることは明白である。つまり、持続は一方通行の時間なのであるが、それだけに、過去化に関する特別な説明がなければならないのである。持続が進んだ分だけ、自動的に過去ができるのだと言われるだろうか。結果としては、確かにその通りである。しかし、その時、持続とは反対のベクトルを持った等質的時間が考えられてしまっていないだろうか。あるいは、過去向きの持続が想像されてしまっていないだろうか。だが、そのような時間は実在しないのである。持続においては、上で述べた常識的時間表象の場合のように、「未来のある事象が徐々に近づいてくる。それは今や現在である。そして、それはすぐにも過去になり、さらにだんだんと遠ざかっていく」と言うことができないのであった。ベルクソンの言う「分析の活発な努力」(D.I., p.96) の正体をつまびらかにすることは容易ではないが、そこには、過去向きの時間を自然に想定したくなる人間精神そのものに由来する誘惑⁽⁴⁾ に、そのつど打ち勝っていくことが含まれているはずである。

このあたりの事情をベルクソンは「落ちる」あるいは「廃棄される」⁽⁵⁾ といった、通常の時間論にはまずもって使用されることのない語を用いて説明している。「この特別な注意が、眼下にとらえているものから何かをゆるめるや否や、この注意が現在から捨てた (abandonner)

ものはそのまま過去になる。一言で言えば、われわれが現在に現実的関心を寄せることをやめるとき、現在は過去の中に落ちる (tomber) ののである」(P.M.,p.169)。つまり、「特別な注意」の方向転換によって、それまで不可分な現在の諸要素であった事象は、いつの間にか過去へと落下するということである。過去へと捨てられた現在は、ベルクソンによれば、もはやわれわれの「現実的関心 (intérêt actuel)」を引かない対象つまりは行動の役に立たない対象である。つまり、「生への注意 (l'attention à la vie)」と換言されることになる、この「特別な注意」が過去と現在とのいわば境界線を成しているわけである。「特別な注意」のスポットライトがあたっているところが現在で、それ以外は過去だということである。だから、それが弛緩すれば現在と過去との区別もあいまいになってしまうだろう。溺死状態から奇跡的に生還した人などの例をあげつつ、ベルクソンはこう言う。「例外的な場合、注意がそれが生に対して持っていた関心を突然放棄することがある。その時ただちに、魔法にかけられたように、過去が再び現在になるのである」(ibid.,p.170)。驚くべきことに、ベルクソンは現在と過去の区別に対してプラグマティックな態度をとっているのである。「もしわれわれが内的生命の連続性を、したがってその不可分性を考慮に入れるなら、説明しなければならないのは、もはや過去の保存ではなく反対にその見かけ上の廃棄 (abolition) だからである」(ibid.,p.171)。

ベルクソンの言いたいことはこうだろう。過去は持続によって現在と実在的に連続している。つまり過去は自体的に実在している。したがって、問題になるのは自体的に実在している過去（と現在）から、この現在が特に選び出されている理由は何かということである。ところで、後に示すように、ベルクソン哲学における主体的現在とは身体なしには成立しない。故に、現在は身体によって一定の限定を被る。その限定が「現実的関心」である。したがって「現実的関心」を引かない事象は過去へと落下し廃棄される。

だから、現在は身体と深く関連し、「生への注意の器官」(ibid.,pp.79-80)である脳の働きに関連している。ただし、この時、持続の方向性に注意しなければならない。というのも、脳は記憶から知覚へと向かう未来向きの時間すなわち持続においては「万力」の役割を果たすこともできようが、しかし過去向きの時間においては何の役割も果たすことはできないからである。なぜなら、そのような時間は実在しないからである。過去向きの時間が実在しない以上は、脳は過去向きの物質的作用を為すことはできないはずであろう。つまり、脳は知覚を記憶に変換することができず—上で述べたように、そもそもそれは物質的作用ではないのだが—、したがって脳が記憶を蓄積することはできないのであり、脳の損傷が記憶そのものを傷つけることもできないのである。道ばたに落ちている小石に知覚を記憶に変える作用を期待する人はいない。同様に、小石と同じく物質にすぎない脳に知覚を記憶に変える作用を期待してはならないのである。記憶は未来向きの時間において、脳を通過するにすぎない。このようなわけで、現在の知覚内容はそれ自体が自動的にすべて保存され、記憶へと変ずるとしなければならぬのである。

本節でわれわれが述べた事柄は次の三点である。第一に、持続は未来向きの時間であり、過去向きの持続は実在しないことである。第二に、ベルクソンの現在とは「生への注意」と相即的であること、すなわちベルクソンの現在とは主体的現在（「生への注意」の方向転換

によって絶えず新しくなる現在をこう呼ぶことにしよう)であることである。ここに主体的とは、この場合の注意が生そのものに由来する注意であるという意味である。生きているとは、注意しているということだからである。実際、ベルクソンのあげた例から明らかなように、この意味での注意が弛緩するのは死に瀕したとき、すなわち生きていない状態に近付いたときであった。第三に、「生への注意」と持続の方向性の観念によって、いわゆる記憶の自動保存説をある程度まで説明できるということである。記憶の自動保存説は、ある意味では当然の主張である。なぜなら、〈私〉とは〈私〉の過去のすべてによって〈私〉であることをわれわれは現に知っているからである。しかし、それはある意味では不可解な思想である。というのも、脳に保存されている記憶だけが記憶のすべてであるようにも思われるからである。これに関して、われわれが述べたことは、脳は現在において存在しているのであるが、その現在は未来向きの時間における現在として考えられねばならないということであった。脳は未来向きの現在においてしか存在しないが故に知覚を記憶にすることができず、つまるところ行動の道具でしかないということである。知覚イメージが最終的には記憶イメージになるとすれば、それは脳の物質的変換作用によるのではなく、時間の推力によって現在のイメージが過去へと落下することによるのである。

では、新しい現在を生み出す時間の推力とは、いったいどのようなものであろうか。次節で、これに触れる。

(二) 注意と過去

持続は宇宙を押している。したがって、人間も持続によって押されている。人間が持続によって押されているとは、人間が常に新しい現在に出会っているということである。さて、新しい現在と古い現在との境界線—境界線という語は不適切ではあるが—は、先に述べたように「生への注意」の方向転換にある。であるとすれば、持続によって「生への注意」の方向転換が引き起こされねばならないはずである。

目の前のりんごに注意してみよう。〈私〉は注意の結果、そのりんごに小さなキズがあることに気づく。この時、〈私〉は「態度の意識」(M.M.,p.110)の変化を経験する。そして、同じくこの時、それまでの知覚に替わって新しい知覚が生じているわけである。ベルクソンは『物質と記憶』で注意を詳しく論じている(*ibid.*,p.109 et suiv.)が、そこで彼はこのように言う。「われわれの記憶が、それが新しい知覚に向かって投げるところの様々な類似したイメージを、次々に選択する」(*ibid.*,p.112)。さらに、こうも述べている。「これはまったく閉じた回路であるため、前の回路を含んでおり、知覚されている対象だけが共通である新しい回路をそのつど完全に創造することなしには、より高い集中状態に移行することができない」(*ibid.*,p.114)。つまり、記憶の投射によって注意の方向転換が生じているということである。記憶=過去が新しい現在を創造するのだ。

引用文中の「新しい知覚」や「新しい回路」という表現に注目したい。注意の結果、知覚が新しくなることは確かに自明ではある。それが注意というものだからである。しかし、「新しい知覚」や「新しい回路」という語は、新旧の知覚イメージを比較してみたら両者

の間に、ある質的变化が観察されたという意味にだけ解釈されるべきではない。知覚が新しくなっているのと同時に、われわれは新しい現在に直面しているはずだからである。持続の相の下では、知覚の新しさは現在の新しさであると言うべきではないか。さらに、二つ目の引用文でベルクソンが「創造する (créer)」という語を使っていることにも注目したい。「新しい回路」を完全に「創造する」とは、既に述べたように、そのつど新しい知覚が、新しい「態度の意識」が、つまるところ新しい現在が創造されているということではないのか。その際、新しい回路が創造される以前には存在していたはずの古い回路は、どこかに消えてなくなってしまうのではない。それは過去へと落下し、記憶として知覚へと投射され、新しい現在を創ることに貢献するのである。新しい回路は「前の回路を含んでいる」からである。

ただし、持続の現在を考察する時、その現在の伸縮自在性に留意する必要がある。ベルクソン哲学の場合、主体的現在が身体なしには成立しない。しかし身体は主体的現在の必要条件にすぎないから、記憶の緊張度に応じて、現在のいわゆる「幅」は異なってくるのである。おそらく、最も短くあり得る主体的現在は身体感覚=運動的な現在であり、最も長い現在は「永遠の現在」(P.M., p.170) である。記憶の作用によって現在の幅が変わるわけである。だから、講演会で原稿を読みつつあること（「変化の知覚」）も現在であるなら、窓の外で急に降り出した雨にちらりと目をやることもやはり現在なのである。同じことが注意に関しても言える。注意は多くの回路を持つ。その中からどの回路が選ばれるかは、記憶の緊張度による。おそらく、もっとも浅い注意は残像を作るだけのそれであり、もっとも深い注意は「実在のより深い層」(M.M., p.115) に到達する注意である。このように、主体的現在も注意もそれぞれ程度の差異を持っている。だが、それらに共通する基本的構図がある。身体とそこへと現実化していく記憶である。本稿が論じようとしているのは、この基本的構図である。

さて、われわれの課題は、持続における時間様相の現在とは何かという問題を考察することであった。今や、われわれは、この課題を、過去はどのようにして新しい現在を創造するのかと言い換えることができる。なぜなら、持続においては、現在が先在し、それが古くなって過去になるのではなく、古い現在が持続に押されることによって新しくなるからである。ドゥルーズなら、こう言うだろう。「われわれはあまりにも〈現在〉というタームによって考えすぎている。われわれは、現在は別の現在によって置き換えられた時にだけ過去になると信じている」⁽⁶⁾。さなぎの中で蝶が既にうごめき始めているように、過去の中で既に次の現在の胎動が始まっている。蝶がさなぎを脱ぎ捨てるように、現在はその古さを過去に落として新しい現在になるのである。われわれの課題は、この時間のうごめきをベルクソンと共に解明することである。実を言えば、われわれはここで、過去の実在の問題といわゆる記憶の現実化の問題に接しているのである。

敷衍すれば、こうである。『物質と記憶』は通常、心身問題を論じた書物だとされている。これはもちろん正当な解釈である。しかし、われわれが本稿で試みているのは、現在が過去からいかにして創造されるのかという時間論的観点からベルクソン哲学を読解することである。「過去は、現在に入りこむことで現在を創造する」(E.C., p.201) からである。その概略は以下の通りである。一方で、『物質と記憶』第四章などでも言われているように、物質は

「絶えず再開する現在」(M.M.,p.154)において一種の振動として存在している。この現在を物質的現在と呼ぼう。身体の定立と物質界の定立は同時であるから、身体は物質的現在と同調している。他方で、純粹記憶(mémoire pure)すなわち過去が実在している。ところで、ベルクソンの意味での時間は物質に作用する力を持っている。つまり、持続(記憶)は物質(身体)に作用することができる(時間の推力)。言い換えれば、精神は身体を行動させる。純粹記憶は最終的には身体に作用し、それを動かすわけである。両者を総合すると、こう言えるのではないか。今述べたように、物質的現在と純粹記憶は身体において合流している。そして、その合流によって、主体的現在が生まれるのである、と。主体的現在の問題は心身問題と類似した構図を持っているということである。なぜなら、心身問題が「時間の関数によって」(ibid.,p.74)考察されねばならないとすれば、身体が物質的現在と共にあることは認めないわけにはいかないから、つまるところ精神である記憶=過去の現在への合流によって心身問題が解明されるはずだからである。

本節でわれわれが述べたのは、以下の三点である。第一は、現在を新しくする注意の方向転換が持続によって引き起こされているということである。第二に、そのことが意味しているのは、新しい現在が過去から生じているということである。したがって、第三に、新しい現在の十全な理解のためには、過去の実在と記憶の現実化という面から、それはさらに考察されねばならないということである。ただし、記憶の現実化に関しては稿を改めて論ずることにし、本稿では過去の実在についてのみ扱うことにしたい。

(三) 過去の実在

現在と呼ばれる不可分な全体に過去すなわち記憶が介入していることは、ベルクソンの多くのテキストから容易に確認することができる。例えば、前節で挙げた注意の回路に関しては、「後に見るように、これらの回路の一つ一つに入ってくるのは、記憶の全体である。なぜなら、記憶は常に現存しているからである」(ibid.,pp.114-115)とベルクソンは述べている。また、現在に過去が介入するとは記憶イメージの投射が行われているということでもあろうが、それについても例えば「対象を見つめた後、急に視線をそむけると、その対象の残像が得られる。この残像は、対象を見つめていた時に既にできていたと想定するべきではないか」(ibid.,p.112)と彼は言う。

このように、過去の現在への介入というベルクソンの主張を文献的に確認することは容易である。しかし、それが意味するものは何だろうか。

いまだ現実化していない潜在状態にある記憶または記憶の集合を、ベルクソンは躊躇なしに過去と呼んでいる。「われわれはそれによって、現在から離れ、まずは過去一般へと、ついで過去のある領域へと身を置きなおす独特な(sui generis)行為を意識する。これは手探り仕事であり、カメラの焦点合わせに類似している。しかし、われわれの記憶はまだ潜在状態にある。・・・少しずつ、記憶は凝縮する星雲のようにならわれてくる。記憶は潜在から現実状態へと移行する。・・・しかし、記憶はその深い根によって過去に結びついたままである」(ibid.,p.148)。われわれは一気に過去へとおもむき、最初に過去一般ついで過去の

特定の領域に身を置く。しかし、その時には記憶はまだ潜在状態にある。それは徐々に現実化する。つまり潜在状態にある記憶は過去だとされているのである。

潜在的な記憶を過去と呼ぶこと、ここには少しの比喩も文飾もない。なぜなら、ベルクソンはここで単に事実の確認をしているにすぎないからである。というのも、ベルクソンにとって潜在状態の記憶は本当に過去を構成しているからであり、それはまた事実として確認されるものであったからである。ベルクソンはこう言う。「われわれの語る直観は、だから何よりもまず内的持続にかかわっている。直観は並置ならぬ継起、内的増大、未来を浸食する現在への過去の絶えざる伸張を把握する。・・・ついで、それは、譲歩しては抵抗し、降伏しては再び自分を取戻す無意識の縁を圧迫している、拡大された意識である。明暗(d'obscurité et de lumière)の素早い交代を通じて、直観はわれわれに無意識がそこにあることを確認させる。厳密な論理とは反対に、直観は、心理がいかにか意識的なものに属するとしても、やはり心理的な無意識が存在することを主張するのである」(P.M.,pp.27-28)。この引用文で、もっとも注目すべきなのは意識と無意識との間に縁(bord)があり、しかもそれを無意識の(意識の、ではなく)縁だとベルクソンが述べていることである。それは、おそらくは伸縮自在で境界のはっきりしない縁ではあろう。しかし、そのような縁がともかくもあるとされていることが重要である。縁の向こう側が無意識にして過去である。縁のこちら側が意識にして現在である。もとより無意識は無意識なのであるから、その内容が何であるかは判らない。にもかかわらず、無意識がそこに実在していることをわれわれが確認できるのは、われわれが実際に縁の経験を持っているからである。そして、縁そのものの確認は現在にして意識である側でなされているのであるから、これは過去の縁が現在にまで到達していることを意味しているはずである。過去の縁と現在は共存している。過去の縁と現在はふれあっている。イッポリトなら、過去は現在の「裏側」⁽⁷⁾であると言うだろう。過去の実在はわれわれの意識の限界として経験されるのだ⁽⁸⁾。

しかし、そう言うためには、もう一つ解決しなければならない問題がある。縁があるということ自体は認められても、その縁の向こうには何も存在していないと言われる可能性があるからである。これについて、ベルクソンは「明暗の素早い交代を通じて、直観はわれわれに無意識がそこにあることを確認させる」と言う。ポイントは、「明暗の素早い交代」が何を意味しているのかである。この箇所をどのように読んでも恣意性の憾みが残るかもしれないが、ここでは、ある観念が意識内に「あらわれること」が「明」であり、別の観念が「消えること」が「暗」だとしてみよう。そうすると、こうなるだろう。われわれが思考し反省する時、様々な観念の「あらわれること」と「消えること」を経験する。しかし、新しい観念はどのように出現できるのだろうか。それが無から生じているのではないとすれば、三つの可能性しかないのではないか。つまり、それは、過去から生じるか、脳(すなわち現在)から生じるか、未来から生じるか、である。ところで、既に述べた持続の方向性によって、後二者は否定される。すなわち、脳は行動の道具にすぎないので記憶はおろか知覚さえ製造することはできなかったわけであるし、また未来から現在へと流れる過去向きの時間は実在しないのであった。したがって、新しい観念は過去から生じているのであって、新しい観念の創造要因の一つとして過去は実在することになるのである。実際のところ、ここで重要な

は、ある観念が単に「あらわれること」ではなく、そこにある種の力の感じがともなっているということであろう。その「あらわれること」は、時に出現しないこともあり得るような、あらわれ方をしているのではない。出現することしかできないから出現している、そのようなあらわれ方なのである。われわれはそのあらわれ一般に対して拒否権を持っていない。否応なく、強制的に、それはあらわれてしまう。過去は言ってみれば不在の泉であって、われわれが現に水流を感じている以上は、意識内には水流しか存在していないにしても、そこに泉の存在を確認せざるを得ないのである。

これによって、われわれは時間と空間の無意識に対する類似性を確認することができる。「実際、私たちの現在の状態へのこの記憶の付随は、私たちが知覚している対象への知覚されていない対象の付随に、まったく比せられるべきものであり、いずれの場合にも、無意識的なものは、同種の役割を果たしているのである」(M.M.,p.161)。時間と空間との差異をあれほど強調した哲学者が、『物質と記憶』でそれらの「類似性」(ibid.)を語っている。その類似性とは、意識されている限りでの空間も時間も、それぞれ広大な外部すなわち無意識を持っているということである。が、この類似性はそれらに共通する問題を提起せずにはおかない。それは、広大な外部があるならば、意識されている限りでの空間と時間はどのようにしてそこから限定されるのかという問題である。この問いにベルクソンは時間に関して空間に関して、廃棄という概念で答えている。既に引用した箇所をもう一度引用しよう。「もしわれわれが内的生命の連続性を、したがってその不可分性を考慮に入れるなら、説明しなければならないのは、もはや過去の保存ではなく反対にその見かけ上の廃棄だからである」(P.M.,p.171)。

こうして、われわれは第一節で開いたままにしてあった問いに帰ってきたことになる。それは過去と現在の行動論的差異の問題であった。

(四) 過去と現在の差異

われわれは第一節で一つの驚きをそのままにしておいた。それは、過去と現在との間にベルクソンが行動論的な差異を見ているということであった。ベルクソンによれば、「生への注意」の「現実的関心」に関わる対象が現在であり、もはや「現実的関心」を引かない対象は過去に落ちるのであった。

これは、ベルクソンにとって主体的現在に単に与えられるものではないということの意味している。常識的に言えば、現在とは否応なく与えられる所与のようなものであろう。われわれは現在においてしか存在できない。これはどうしようもない事実である。われわれは時間がわれわれの手の及ばない何物かであることをよく知っている。そして、時間が人間の自由にならないことをベルクソンも認めるであろう。というのも、物質的現在は「常に再開する現在」だからである。物質的現在は、現在に否応なく現在であるということの意味している。しかし、こうした物質的現在とは別に、「経験が、われわれの実利の方に屈折しつつ、それが人間固有の経験になる決定的な曲がり角」(M.M.,p.205)のこちら側に、主体的現在または人間的現在があるのである。ベルクソンにとって、主体的現在は生み出されるもので

あり、開かれるものである。

現在と過去の行動論的差異は、理論的には以下のように説明されるだろう。主体的現在と物質的現在とは同調している。なぜなら、主体的現在を切り開く身体と物質的宇宙は同時に定立されるので、その限りで、身体はその他の物質と同じように一つのイマージュにすぎないからである。しかし、身体は単なる物質ではない。それは生きている物質である。身体は自己自身の生存のために環境と交渉する。その時、身体の行動意欲が反射され知覚イマージュがあらわれる（純粹知覚）。生への意欲が創り出した純粹知覚のフィールドは、したがって「生への注意」の最大延長と拡がりと同じくしているはずである。このようにして、もっとも基本的な知覚の場があらわれる。しかし、このフィールドはまだ十分に人間的なものにはなっていない。なぜなら、純粹知覚は持続に瞬間的切断をほどこした結果得られるものとされているので、理論上それ自体は持続しないからである。そこから、純粹記憶＝過去がそこに合流しなければならない必要性和必然性が生じる。そして、この合流の結果、人間的経験があらわれ、また同時に人間的現在があらわれることになるのである。したがって、現在は身体的功利性によって限定される。ベルクソンはこう言う。「意識そのものについて人がどんな考えを持つにせよ、・・・身体的機能を果たす存在において、意識は行動を統括し選択を照らす役割を持っていることに異論をさしはさむことはできないだろう。だから、意識は決断に直接的に先行するものや、過去の諸記憶のうちで、これと有利に組織化されるものすべてに光を投じるのである。残りのものは闇の中にとどまっている」(ibid.,p.157)。ここで、闇とは、ベルクソンの意味での無意識のことであるから、つまりは過去のことである。何度も確認したように、行動の役に立つ記憶のみが現在になっており、残りは過去のままであるとベルクソンはここでも主張しているわけである。意識は自分が保持している認識を脱落させることに関心を持っているのである (cf.,ibid.)。

しかし、具体的にはどういうことなのか。一本の鉛筆を例にとろう。鉛筆そのものは、燃やされでもしない限り常に現在にある。確かに鉛筆が古びていくことはあるが、しかしそうすると今度は、その古びた鉛筆が現在にあると言わざるを得なくなる。空間は物質を現在において保存し続けるのである。物質は常に現在にあり過去にならない。ところで、われわれの生活は物質の中で、物質と共に営まれている。この限りでは、あたかも過去など存在し得ないかのようである。しかし、われわれはある出来事が過去であることを明白に知っている。したがって、鉛筆そのものは過去にならないのであるから、そのかわりにと言うべきか、知覚されている時点で既に制作されていた鉛筆の記憶イマージュ⁽⁹⁾が過去に落ちるとしなくてはならないのである。だから、鉛筆に関して過去時制をもって語ることができるならば、それは〈私〉と鉛筆との関係においてでしかない。記憶イマージュを作ることができるのは、〈私〉だけだからである。故に、例えば5分前に〈私〉が鉛筆を使っていたことが過去であると言われる時、問題になっているのは、その5分の間に鉛筆が古くなったことではなくーそれも大いに問題にし得るがー、5分前に〈私〉が鉛筆とある関係を取りむすんでいたということなのである。その関係がベルクソンによって「現実的関心」と呼ばれたものである。そして、それが今は消えてしまっているわけである。実際、もし〈私〉と鉛筆の関係が〈私〉によって維持され続けているとすれば、〈私〉は鉛筆を現在にあるものとして認知するので

はあるまいか。そして、その関係がもはや維持されなくなった時、鉛筆の記憶イメージは過去に落ちるのではあるまいか。簡単に言えば、〈私〉が鉛筆を実際に使っている時は、鉛筆と〈私〉は同じ現在において存在しているが、鉛筆から気をそらし例えば消しゴムに関心が向かったその瞬間に、鉛筆そのものは確かに相変わらず現在にあるのであるが、しかし鉛筆の記憶イメージは過去に落ちているのではないかということである。

二つの誤解を解消しておきたい。一つは、実際のところ〈私〉が「現実的関心」をもっていない事物は無数にあるわけであるが、それらすべてが過去になっているとはどうてい思えないというものである。これに関しては、記憶イメージを作るためには、その対象が少なくとも一度は知覚される必要があると回答できるだろう。つまり、〈私〉にとって過去であるのは、少なくとも一度は〈私〉の知覚の場に与えられたことがあり、記憶イメージが作られる出来事であればならないということである。しかし、第二に、そうであるならば、そこに時間的順序があるのはあまりにも当然ではないのかと言われるかもしれない。つまり、いったん知覚され、その後知覚されなくなるのであるなら、そこには既に前後関係ができているはずである。だとすれば、現在と過去の行動論的差異はこの時間的順序に還元されるはずである、と。すなわち、行動論的差異によって過去と現在とが区分されるのではなく、事態は逆であって、すでにそれらが区分されているから、そこに「現実的関心」の移行を見ることができないのではないか、と言われるかもしれない。これについては以下のように回答できるだろう。最初に、その時、時間的順序が考えられている時間とは何であろうか。等質的時間ならば、そこには確かに時間的前後関係がある。しかし、周知のように持続においては時間的前後関係を定立することができないのである。ついで、こう回答することもできよう。すべてのものは同一の物質的平面にあるのであるが、その中から特に選ばれた対象以外の記憶イメージは過去に落ちているということが現在と過去の行動論的差異であった。だから、この問題は同一平面上の選択の問題であって、その平面の継起の問題ではないのである、と。鉛筆の記憶イメージが過去に落ち、今は消しゴムが現在になっているとしても、机はその間ずっと現在であるということがあり得るのである。しかし、そうは言っても、最初に鉛筆の記憶イメージが過去へと落ち、次に消しゴムのそれが、さらには机のそれも過去に落ちることがあるとすれば、結局はそのことによって現在が継起することになり、そこには既に時間的順序があるのではないのかと再反論されるかもしれない。この再反論にはこう答えることができる。確かに時間的順序をそこに見いだすことはできる。しかし、そのようにして見いだされた時間は、上で述べたように実は等質的時間なのである。敷衍しよう。

そのような時間的順序が過去向きの時間を構成するだろうことは明白である。鉛筆、消しゴム、机 etc は順序の観念によって連結され、各項は「より先・より後」の関係を持っているからである。ところで、第一節で述べたように、過去向きの持続は存在しない。ベルクソン哲学では、過去向きの時間は、それがどのような外見を持っていようと、すべて等質的時間である。したがって、上記の時間的順序は等質的時間を構成するのである。換言すればこうである。等質的時間とは軌跡の制作と共に発生する時間である⁽¹⁰⁾。ベルクソンがよく主張するように、運動そのものは持続であるが、運動の軌跡は等質的時間なのであった。軌跡が作られる時、等質的時間も作られるのである。ところで、鉛筆、消しゴム、机 etc の記憶

イメージの過去への断続的落下は、〈私〉の行動の軌跡を〈私〉の記憶の中に制作する。このようにして、〈私〉の行動によって等質的時間が作製される。このような時間はいかにも〈私〉の現在と〈私〉の前進を語っているかのようではある。先ほどまで〈私〉の関心が鉛筆にあり、そして今は消しゴムにあるとすれば、その分だけ、〈私〉および〈私〉の現在があたかも時間的に前進しているかのようだからである。しかし、ごまかされてはならない。そのような時間は、数直線上を点が移動するという等質的時間の基本的構図と平行なものである。数直線上の数字が鉛筆・消しゴムといった物体の記憶イメージにとって代わられただけのことだからである。〈私〉の行動が等質的時間の発生源であり得るわけである。持続の前進はそういうものではない。持続の前進は、時間的順序においてではなく、純粹過去が身体を押し出すことによって〈私〉が常に新しい状況=現在と出会っているという、その出会いにおいて語られねばならないのである。

だから、〈私〉の行動の記憶に持続を求めてはならない。むしろ、〈私〉の行動そのものにおいて現実的に注意の対象が次々と替わっていくのは何故かと問うべきなのである。そうすれば、持続の推力によって注意の転換がもたらされ、それにともなって〈私〉の現在が常に新しくなっていくことが明らかになるのではないか。新しい現在の新しさは過去の絶えざる進展から生まれてくるのである。

（五）要約と展望

本稿の内容を要約しておこう。本稿の課題は持続における時間様相の現在とは何かという問いを考察することであった。

この問いに本稿はこう答えた。人間は、持続に押されることによって、さらに人間は生物的功利性（「生への注意」・「現実的関心」）を持たざるを得ないということによって、物質的現在とは別に、いわば功利的現在を制作するのである。その制作は心身問題の場合と類似した構図すなわち物質的現在と身体への純粹記憶の現実化によって成される。

功利的現在あるいは主体的現在とは、主体の「現実的関心」を引くイメージだけが現在になっており、その他のイメージは過去へと廃棄されているということであった。これが、ベルクソンによる現在の特異な規定の一つなのである。しかし、そう言うためには過去が実在していなければならない。新しい現在の新しさを創っているのは過去の前進によるとされているからである。そこで、われわれは第三節で過去の実在の問題をあつかったのである。

過去の実在に関しては、直観に関するベルクソンの記述を引用しつつ、過去の縁は現在と共存しているとわれわれは指摘した。過去の縁は意識の限界であり、それは現在とふれあっているのである。言ってみれば、過去は現在の裏側なのであった。

現在と過去の行動論的差異（第四節）に関しては、こうであった。純粹記憶が身体へと合流する時、それは身体的限定を受けざるを得ない。ところで、身体は功利性の体系である。したがって、功利的現在があらわれることになるのである。この時、注意しなければならないことは、過去への記憶イメージの落下が持続を形成しているのではなく、持続が進展しているが故に落下が生じているということであった。

つまるところ、われわれが現在を生きていること自体が心身が合一している証しなのであり、その現在が常に新しい現在であるということは、われわれが持続によって押されているということの意味しているのである。

われわれは、記憶の現実化の問題をやむなくおきざりにしてしまった。しかし、ベルクソンの現在論の十全な記述のためには、それを論じないわけにはいかない⁽¹⁾。それを為すことが次の課題である。

(註)

ベルクソンからの引用はすべて単行本のページ数を直接、該当箇所に記入した。その際、以下のような略号を用いた。引用文中の傍点もすべて筆者によると思われる。

- D.I. *Essai sur les données immédiates de la conscience*
 M.M. *Matière et mémoire*
 E.C. *L'évolution créatrice*
 P.M. *La pensée et le mouvant*
 E.S. *L'énergie spirituelle*

- (1) 拙稿「ベルクソン哲学における新しい現在」(中京学院大学経営学会編『中京学院大学研究紀要』第11巻、第1号)を参照されたい。
- (2) 『持続と同時性』には、このような意味での現在をベルクソンが「橋 (pont)」と呼んでいる箇所がある。v., *Durée et simultanéité* pp.45-46
- (3) だからこそ、ベルクソンの述べるように、過去には一氣に到達しなければならないのであって、しかも、これ以外の到達方法はないのである。
- (4) ベルクソンはこう言う。「来るべき継起もやがては過去の継起になるであろうから、来るべき持続についても過ぎ去った持続と同じ扱いをしてもいいとか、来るべき持続は今からでも展開可能であるとか、未来はそこに、巻かれたままではあるが、既にカンヴァスの上に描かれているとか、われわれは思いこむのである。これはなるほど錯覚ではあるが、人間精神のある限り持続するであろう、根こそぎに出来ない自然な錯覚なのである」(E.C., p.341)。
- (5) 廃棄という発想は、ベルクソンの著作のあちこちで実際に使用されている発想である。实例を『創造的進化』と『物質と記憶』から一つずつ示しておきたい。『創造的進化』において、ベルクソンはこう記述する。「あたかも、ある定かならぬ漠とした一つの存在、思いのままに人間とも超人とも呼ばれるような一つの存在が、自己を実現しようと努力したすえ、途中で自己自身の一部を捨てる (abandonner) ことによってしか、そこに到達しなかったかのごとくである。それらの廃棄分 (déchets) は、残りの動物性によって、植物界によってさえ、あらわされている」(E.C., pp.266-267)。『物質と記憶』では、次のように述べている。「しかし、私たちはここに、新たな形の下に、本書のはじめから追跡している絶えず生まれ変わる幻想を再発見する。人は、身体の諸機能と結びついている意識でさえ、それが実践的なのは偶然であって、本質的には思弁へ向かう能力であるということ、とかく信じたがるものなのだ。そこで、意識が純粹認識のた

めにあるとされてしまうと、意識が保持している認識を脱落させることに、それが関心を持つということは認められないから、意識がそれにとって完全には失われていないものを照らすことに見切りをつけるということは不可解になってしまう」(M.M.,p.157)。

- (6) G.Deleuze *Le bergsonisme* pp.53-54 P.U.F. 1968
 (7) J.Hyppolite “Aspects divers de la mémoire chez Bergson” : *Figures de la pensée philosophique I* p.488 P.U.F. 1971

- (8) このように、持続には継起という側面と共存という側面が確かにある。これらの一方を他方に直接的に還元することは不可能である。なぜなら、共存は同時的であるが、継起は同時的ではないからである。ここから、継起と共存に関する三つの解釈が出てくることになる。第一は、それらを相互独立的なままにしておくことである。つまり、光が粒子的／波動的に解釈されるように、持続も相互独立的な解釈を許す二つの面を持つとしておくことである。第二は、共存を基礎において継起を語ることである。第三は、継起を基礎において共存を語ることである。

第一の解釈を採用することはできない。ベルクソンは継起と共存にどんな矛盾も対立も感じていなかったに違いないからである。第二の解釈は、おそらくドゥルーズを典型例とする解釈である。これに対して、多くの研究者が採用しているのは第三の解釈だと思われる。つまり、第三の解釈では、共存自体が継起するのが持続だとされるのである。したがって、第二の解釈においては、継起しない時制がどこかに設定されなければならない。それが存在論的過去である。存在論的過去は、それ自体は継起しないので、言ってみれば永遠の過去であり、この世の始めから終わりまでずっと過去であり続ける形而上学的過去である。そして、この過去に対して現在が継起するとされる。

われわれが本稿で採用しているのは第三の解釈である。おそらく、ベルクソンの言う「過去一般」(M.M.,p.148)は存在論的過去ではないであろうし、存在論的過去なしにでも持続を語ることは十分に可能であろうからである。だが、こうしたことについては別稿をまたなければならない。

- (9) 「そのことを考えれば考えるほど、知覚そのものと同時に記憶が創られるとしなければ、記憶がどうして生まれうるのかが理解されなくなるだろう」(E.S.,p.131)
 (10) 拙稿「ベルクソンにおける等質的時間」(中京学院大学経営学会編『中京学院大学研究紀要』第10巻1号・2号合併号)を参照されたい。
 (11) 持続が未来向きの時間だからといって、過去の次に現在があらわれるわけではないことを明示する必要があったのである。